

## 「第20回PFシンポを振り返って」

PF懇談会会長

佐々木 聡（東京工業大学・応セラ研）

昨年のPFシンポは放射光発生20周年の記念行事と連続して開催されたが、PFシンポ自身も今回で、ついに20年の節目を迎えた。施設の20年とはちょうど自分ぐらいの年に相当するのかなと思っていたが、低エミッタンス化や直線部増強計画などを通して、PFの方がずっとリニューアルされていると愕然とした。PFリングは1997年に第3世代光源に近い性能に改造され、エミッタンスを130 nmradから36 (27) nmradに抑えたことで、今回の外部評価では、最も象徴的なことと高い評価が下された。

今年のPFシンポは、10～20年先を見越したERLがらみの将来計画が煮詰まってきた、非常に活気があった。2日間のPFシンポを通じ、参加者の意気込みや熱気がむんむんと伝わってきた。また、加速器グループ関係者がワッと押し掛けたセッションもあり、オフィシャルな数字以上に大盛況であった。間違いなく、将来計画がPFを活性化している。

最初に受付で、258ページからなる「放射光将来計画検討報告——ERL光源と利用研究」を渡され、PF将来計画と真っ正面から向き合うこととなった。第4世代放射光光源ERLの開発とその応用分野に絞った将来計画ができあがっており、PFが将来にわたって放射光科学を牽引する道が少しずつ開けてきていると思った。特にPFや高エネ機構は、優秀な加速器研究者を多数抱えており、難しいERL開発に地の利がある。ERL加速器での放射光研究についても、研究会報告の形で発表があった。現在の研究レベルが20年前のPF創設のときの想像をはるかに超えていることを考えると、今後どんなブレイクスルーが起るか楽しみである。研究テーマを探す日々の努力や検出器・時間分解測定法の開発にも期待したい。

将来のPFシンポの姿を想像するとき、年老いた面々の顔しかなかなか浮かんでこない。その理由を考えると、PFシンポに参加している若者の数が少ないことに行き着く。現在のシンポジウムの目的が施設運営や研究課題評価などにあり、その性格上、中堅どころが集まる会となっているのも、ある程度は、やむを得ないのであろう。しかし、ユーザーコミュニティの将来性・継続性を考えれば、年齢のバランスがとれていることが重要であり、その意味で以下のことを提案したい。

すなわち、「PFシンポで若手が発表できる機会を作ること」。若手が簡単に発表できる内容は、普通に考えれば、自身が行っている研究についてである。放射光合同シンポジウムの趣旨に抵触しない範囲で、いいアイデアはないものだろうか。一案として、ビームラインでの1年間の様子を「若手のユーザー」に報告してもらおうセッションを考えてみた。装置や測定システムなどの改良、他にどんな研究が行われているかなど、発表者自身の研究成果も含めて、実験ステーション毎に1人ずつ発表してもらおう。人選はステーション 担当者にまかせ、院生あるいは若い助手の中から選ぶというのはどうだろう。

PFの将来のためには、他にないサイエンスを展開するというスタンスが大切である。ビームラインと強く結びついた形での若手の発表は、研究をエンカレッジする上でも、SPring-8 や他の放射光施設と比べた独自色を考えていく上でも、貴重な体験になるはずである。PFシンポが、若い人のサイエンスの方向性を見出すきっかけとなれば、その役目を十分に果たしているに違いない。

最後になりましたが、実行委員長をはじめご支援いただいた皆様に心から感謝いたします。